都市空間の構想力

空間文化の博物学 第3回

東京

街路は都市の構造を反映し、都市の構造の中に組み込まれている。それを敷衍し、空間を再定義する。

東京大学 都市デザイン研究室

街路の形態が界隈を捉える

西村幸夫（東京大学教授）

street と road

私たちはここで street を論じたい。

では、street とは何か、road とはどう違うのか、日本語で言うとどうなるのか。そして何故ここで street を論じなければならないのか。

street はラテン語の strata（舗装された道の意）から来ている。都市の中の道、すなわち街路のことである。street は、したがって、多くの場合舗装され、建物が建ち並び、それがストリートエッジを形成している。つまり建物と路面とで囲われた三次元の空間なのである。これにたいして road は、より広い意味で用いられ、多くの場合都市間をつなぐ道を意味している。ここには明確な三次元の空間イメージはない。日本語の道、道路である。

まちからまちへ旅するときは on the road を用いるが、まちで学ぶといった表現には learn things on the street のように street を用いる。street は都市生活の教室ともなりえるのだ。

street すなわち街路はそこに建つ建物なしには成立しない。建物には当然正面があり、側面があり、裏がある。したがって街路にも表通りがあり、横町があり、裏道がある。

つまり、街路は必然的に都市の構造を反映し、都市の構造の中に組み込まれたものなのである。

人間の行動を誘発する街路

街路は、それだけを見ると、当然ながら線的な存在である。

しかし、街路がそこに建つ建物までを含んでいると考えると、その範囲は次第に面的に広がっていく。ひとつの街路がその背後により広い界隈の物語を紡ぎ出すことも可能なのである。

いやむしろ、街路の背景にはそのような面的に広がる世界が何かしらあるはずだ。問題は私たちがその物語を読み込む目とその変化を捉える耳を持っているかどうかの話なのである。

たとえばこういうことである。

街路には建物が建っているのであるから、そこには必ず人間の生活があり、行動がある。街路は車の通行だけに貢献しているわけではない。

そして、人間の活動は比較的幅の狭い街路、小さな街区で多く誘発される。なぜならそこには車の交通から安全で自由な環境があり、出会いと発見が保障されているからだ。

逆に言うと都市の側には、そのような街路をうまく地区に配置し、人間の動きにある種の磁場を作ろうとするというベクトルが働くことになる。

それが意図されたものであっても、はからずもそうした意図を持つことになったとしても、街路空間はそうした界隈の構造の中で読まれる必要がある。次項に挙げた境外参道や各種アプローチ街路の姿にそのことは明確に現れている。

一方で、新と旧、上と下、表と裏、たてとよこなど一対の街路の存在が、それらの関係のあり方によって界隈に「ある種の緊張関係」を生み出すことがある。そして往々にしてそのような関係は都市を遊動する歩行者の目から読解するのに役に立つ。

一対の街路がある特別の関係を持ち得るということは、たとえば街路形成の歴史を見れば簡単に理解することができるだろう。

たとえばすべての新道は地域に代替の可能性を広げることを意図しており、それが旧道の意味を変化させ、界隈に新しいダイナミズムをもたらす。土地に余裕のない漁村のような場合には、都市構造はおおよそこうしたバイパスによる選択肢の付加の歴史であるといっても過言でない。

こうした選択肢が、東京のような面的に広がる大都市においても、子細に見れば随所にミクロなダイナミズムをもたらしている。その輻輳が現在の都市を築いているのである。それらの選択肢が誘発する人間の行動は都市生活にある種の厚みをもたらしてくれる。

叉路の潜在力

日本の街路の不思議な点のひとつに、近代になって街路の名称をほとんど失ったという反面、交差点には名称が付けられているということがある。他国の都市でこれほど交差点に名前を持ったところも少ない。それほど名付けられた叉路が多いにもかかわらず、これら交差点に正面を向けた建物は、近代以降においてもごくわずかしかない。それもまた日本建築の不思議な点である。

叉路が名前を持っていることは街路に名前がないことの裏返しでもあるのだが、より積極的に交差点の可能性を考えることもできるだろう。

古来、辻にはそれなりの意味が込められてきた。辻商いや辻売り、辻番所やそこに設えられた辻行灯、辻芸に辻踊・辻説法、辻芝居に辻相撲、辻地蔵に辻堂など辻に関した熟語は数多い。都市生活の焦点であったことが言葉からも読み取れる。

特に横丁を持った両側町ではなく、辻に合流するいずれの街路も表の街路であるという四面町の場合は辻そのものが特別な意味を持つ。そのような辻は計画しない限り生まれないからである。

また、いわゆる四つ辻以外の不整形な辻は、街路の形成史がそのまま辻の空間に現れており、界隈に独特の様相をもたらす点でも特異である。そのポテンシャルをどのように界隈として受け止めてきたかがここでのひとつの着目点である。

街路からのデザイン

一つの街路を他の街路と対で考え、両者の役割分担や重層化によって街路はたんなる線を超えて、面的に広がる。さらには街路に面する街区内の土地利用を考えて、街路と直交する方向や街区の裏側の工夫へとデザインを展開することができる。

また、叉路や分岐路など街路の内でも特異点といえるポイントに特に留意し、デザイン的な配慮を集中させることが戦略的に重要である。線的な街路を点によって特異化するように扱うことによって線としての街路は特異点という点の配置手法としての意味を持つことになる。

●まちへと伸びる参道が景を成し、界隈の個性を説く

境外参道は、まちなかに佇む鳥居とその奥に控える神社境内とを結びつけ、一つの景を生み出す。その景は境内を核とした界隈の広がり、さらにはその界隈の精神性を解き明かす貴重な手がかりとなる。

●アプローチ街路としての境外参道

我が国には、重要な建築や空間に対する多彩なアプローチ街路が存在する。寺社参道や茶庭の露地は、土地の高低差、道の曲折、効果的に配された添景物が創り出すシークエンス景観によって、心理的な高揚感を誘う。また、寺社境内、大学キャンパス、公園、官衙等における明快な軸線は、一点透視の構図を生み出し、建築物や空間の象徴性や記念性を高める。

ときに、これらのアプローチ街路が、敷地境界を越え、周囲の都市空間へ広がることがある。その典型は、欧米由来のバロック的な都市設計手法によって、近代以降に実現した東京駅、浜町公園（図1）、そして国会議事堂等の前面街路である。これらの街路は、沿道の建築物群や並木とともに、周辺の都市空間を統合し、壮大なヴィスタ景を創り出す。

このような空間は大概、都市を象徴するごく限られた場所に布置されるのに対して、同様の空間構造は、より日常的な生活風景の一部として、まちなかの神社境内とそのアプローチ街路である境外参道との間にもみられる。境外参道とは、境内の外、つまり一般市街地に展開される参道のことである（図2）。境外参道は、街路を介しアイストップとなる社殿や社叢を望む景、あるいは背後に位置する境内の標となる鳥居や社号標等のモニュメント（以下、起点モニュメント）がまちなかに佇む景を創り出す（図3）。

現在、起点モニュメントを有するものに限れば、東京都心部において、20余りの境外参道の存在が確認できる（図4）。それらの生成パターンは、境内地縮小の過程でまちなかに取り残されたもの、境内参道を延伸するかたちでまちなかに新たに挿入されたもの、あるいは起点モニュメントの設置によって既存の街路を参道としてみたてたものなどバラエティに富む。このような空間の履歴が、境外参道の内包する空間文化の豊かさとして顕れてくる。

●界隈の空間的広がりを説く

境外参道が創り出す景は、神社境内を核とした界隈の面的な広がりを想起させる手がかりとなる。とりわけ、近代以降境内地を縮減させ、まちなかにおいて、空間的な存在感を喪失する傾向にある神社境内において、境外参道は往時の境内地の痕跡であり、貴重な都市空間遺産として位置づけられる。

芝大神宮（港区）は、1階を駐車場とし、その上部に社殿を据え、境内地ぎりぎりまで商業・業務ビルが建ち並ぶ都市型神社の様相を呈し、江戸・明治期のそれとは一変した風景が広がっている（図5～7）。しかし、舗装や街路灯のデザインに関して一定の配慮がみられる街路が神社境内からまちへと伸び、まちを行き交う人々に、潜在的な界隈の空間的広がりを気づかせている。

●界隈の精神性を説く

くわえて、境外参道は神社境内を核とした界隈の成立に関わる精神的要因を解き明かす手がかりを与えてくれる。まちとその氏神である神社との間に生み出された不可視な都市構造を浮かび上がらせる。これは、とりわけ境外参道が新たに付加されたタイプに強くみられる。

下谷神社（台東区）では、関東大震災後の復興区画整理時に街区内部に移設した境内から、朱塗りの鳥居が設置された幹線道路（浅草通り）に至る、周囲より若干広幅員の街路が新設された。整形に区画されたまちにおける境外参道の存在は、単に界隈の空間的広がりを示すだけではなく、復興を共に成し遂げてきたという界隈の強い結束を示している（図8、9）。

一方、大塚天祖神社（豊島区）では、境内から大塚駅前まで直線の境外参道が存在したが、戦災復興区画整理時の街区再編により、一度は境外参道は姿を消す。しかし、その後、地元商店街によって鳥居の形を模したゲートが設置され、境外参道としての景は再生された。商店街の門前としての心意気を感じさせる空間である（図10、11）。

まちなかには起点となる鳥居や社号標を喪失した境外参道が多数潜在している。これらも含め、神社境内を核とした界隈の個性を解き明かす手がかりとして、境外参道のより積極的な位置づけが望まれる。

（岡村　祐）

▼参考文献
岡村祐他（2005）「境外参道の空間特性に関する研究――東京都心部をケーススタディとして」、日本都市計画学会都市計画論文集41-3

図1　浜町公園へのヴィスタ景
浜町公園は帝都復興事業による三大公園の一つである。公園内から西側の市街地へ4列のイチョウ並木を配した軸線が確保されている。

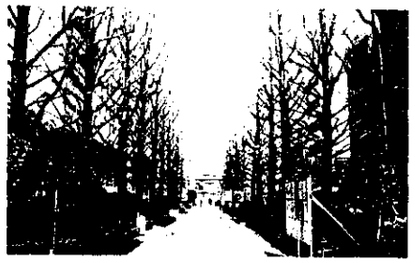


図2　境内周辺の模式図

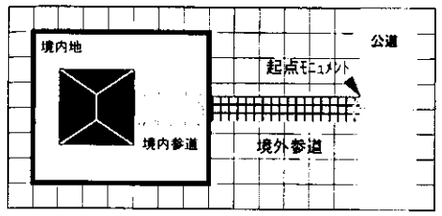


図3　吹上稲荷神社（文京区）の境外参道
街区内部に立地する神社境内からまちなかの主要道路（坂下通り）へ境外参道が伸びる。参道の起点には、鳥居および社号標が立つ。

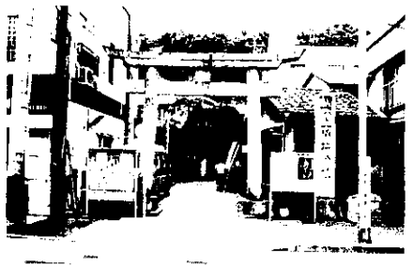


図4　東京都心部における境外参道を有する神社の分布
東京都心部における約250社に対する現地確認調査を行い、境外参道を有する20社が抽出された。

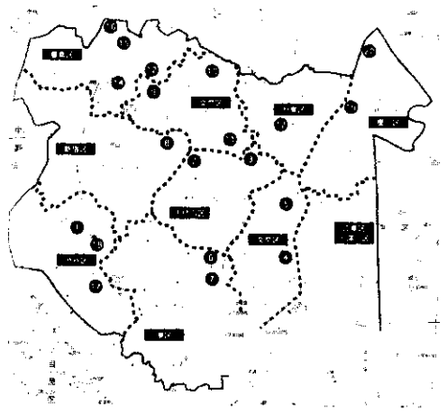


図5　芝大神宮の境外参道

図6　明治期の芝大神宮（写真と同位置）
（出典：『東京名所鑑』）

図7　芝大神宮における境内地の縮減の過程（明治7年神社明細帳を基に作成）

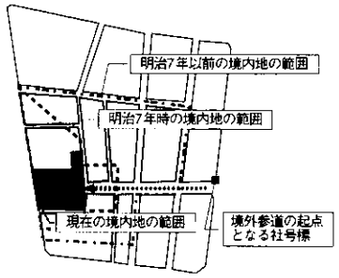


図8　下谷神社の境外参道
幹線道路に立つ朱塗りの巨大な鳥居は、街区内部に位置する神社へと人々を誘う。

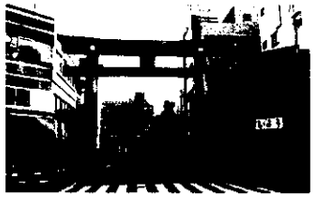


図9　区画整理による下谷神社の移設
（出典：『鳥居の影：下谷神社史料』）

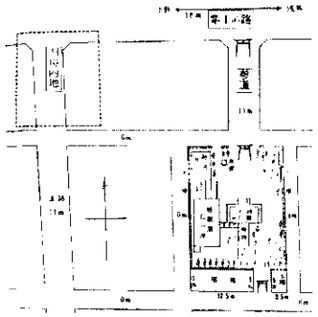
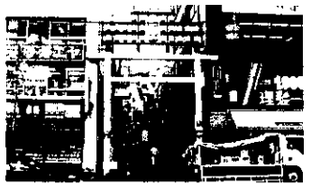


図10　大塚天祖神社の境外参道



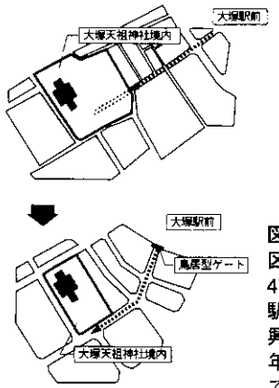


図11　区画整理による大塚天祖神社周辺の街区の再編（上図は昭和42年時、下図は昭和47年時の住宅地図を基に作成）
駅前を起点とする直線の境外参道は、戦災復興区画整理によって、一度廃される。昭和60年に鳥居型ゲートが設置され、境外参道としての景が再生された。

●揺れながら並走する街路が都市に厚みを与える

回遊体験が生み出す広がりのある領域を都市の厚みとして捉えよう。1本調子の目抜き通り＝ブールバールではない。「揺れながら並走する2本のみちのペア」という街路形態こそが、都市の厚みを生み出す決定的なしかけなのである。

●複軸が回遊を生み出す

近代都市では、都市の中心を「目抜く」通りにハイライトが集中する。街路システムの頂点に君臨する目抜き通りは、交通処理機能を担うだけではなく、都市の象徴として整備される。ブールバールを歩く我々は、予め計画された動線の上を、予め意図された眺めを鑑賞しながら歩く。許される逸脱は、オープンカフェでの滞留や直行する路地への踏出しがせいぜいで、その遊歩は単調と言わざるを得ない。中途半端なブールバールばかりの東京では、なおさらである。

では、この逃れがたい単調さが解消されるのはいつか。そう、路地に足を踏み入れた遊歩者が、路地に直交する、すなわち、元の通りに並行する街路を見つけてそちらに踵を向けたときに他ならない。ブールバールを進む運命はいったんキャンセルされて、もう一つのみちが始まる。戻るか、もう少し進むか、もう一つのみちはブールバールに付かず離れず、揺れながら延びる。遊歩のスリルを格段に増すこうした「複軸」の構造こそが、都市の回遊を肉付けている。

●都市に遍在する複軸構造

緩やかに並走する二本の街路を一つのペアとして見てみよう。まとまりがもっとも顕著に感知されるのは、新道／旧道のパタンだ。旧道のすぐ脇に、バイパス的に新道が開設される。旧道は歩行者のための街路として繁栄を維持し、新道は自動車幹線として機能する。例えば明治期に幹線として拡幅された不忍通りとそれ以前からの小河川筋である藍染通り（通称へびみち、台東区・文京区）は、約50mを距てて並走している。沿道の高層マンションが広い壁面を揃えて建ち並ぶ「表」の不忍通りと、落ち着いた低層住宅と馴染みの商店を抱える「裏」のへびみちの対照を楽しみつつ、数キロに亘って往還することができる（図12）。他に、「表」の明治通りと「裏」のキャットストリート（渋谷区）、巣鴨（豊島区）の「旧」中山道（地蔵通り）と「新」中山道（白山通り）など（図13、図14）、随所に複軸構造が存在する。線形、機能、幅員など、ことごとに対照的な2軸が、相補って都市の厚みを創出している。

●「対照」に収まらない「ねじれ」

図13　南阿佐ヶ谷では駅前で分岐する二つのみちが対照的な姿をみせる。

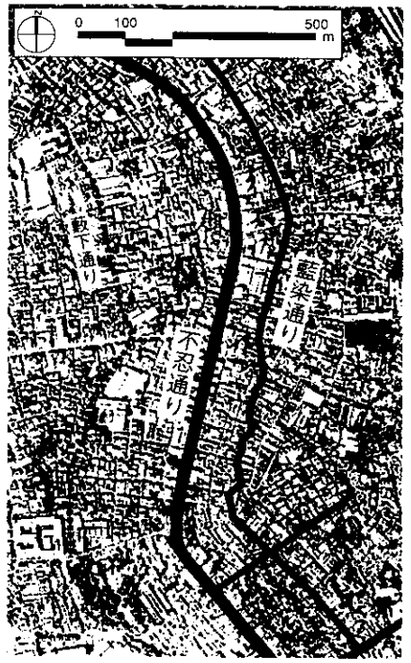


図12　不忍通りと藍染通りが谷筋に沿って、長い区間を並走する。
2者の間を走る裏道や、台地上に並行して走る藪下通りを含めた複数軸構造としても捉えられる。

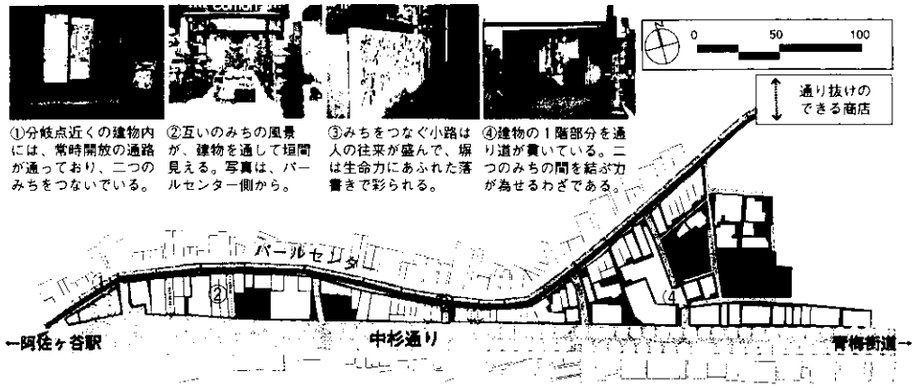
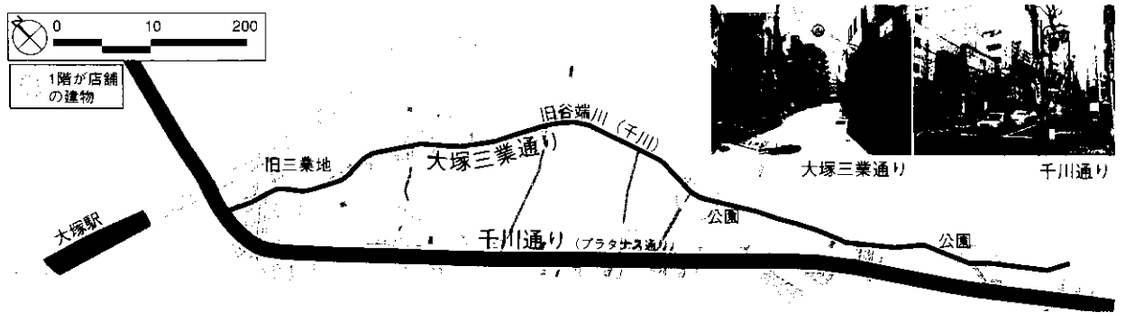


図14　阿佐ヶ谷では、不即不離の二つのみちを、人々の動線や視線が緊密に縫い合わせる。

図15　大塚では、人々は日々の暮らしのなかで二つのみちを巧みに選択しつつ、まちなかを歩いている。



しかし、新／旧、表／裏等は常に画然と対照をなしているわけではない。神保町（千代田区）では、裏手の繁華なすずらん通りと表の靖国通りにおいて、表／裏は渾然とする。本郷菊坂（文京区）は、「裏みち」だった下道が強まり、上道との回遊が生まれて都市空間が厚みを増した例だ。

複軸構造がその魅力を最大に発揮するのは、性質を異にする二つの軸が、「対照性」の枠に収まりきらない拮抗を見せるときではないだろうか。この拮抗が、複雑な「ねじれ」と呼ぶべき様相を呈している2例を、以下に紹介しよう。

阿佐ヶ谷駅（杉並区）の南口、鎌倉旧道にあたるパールセンター商店街は、自然道らしい蛇行を以って、駅前から青梅街道まで走る。戦時中の疎開帯を起源に持つ中杉通りは、堂々たるケヤキ並木を従えて、駅前から青梅街道の杉並区役所前までを直線で目抜くシンボルロードである。一度は離れる両者は、建物一つ分までに近付き、交わるかと見せて、再び離れてゆく。二本をつなぐ幾本かの小路の他に、両側に入り口を持つ店舗が、めくるめく回遊を生み出す。店舗の勝手口に切り取られて垣間見えるもう一方のみちが、寄り道ごころをくすぐる。表通りとしてつくられた中杉通りの歩道には店舗の勝手口が細やかに連なり、裏路地の趣を見せてみち行く者を眩惑する。

夏、人為を強調する直線的な中杉通りでは、自然の樹木が密度高く空を覆い、ブールバール性を高らかに宣言する。自然に任せて蛇行するパールセンターも負けじと、人工天蓋のアーケードを七夕飾りで彩る。自然と人為がねじれつつ共鳴している。

JR大塚駅の南口の千川通りと大塚三業通り（豊島区）は、形状は阿佐ヶ谷のペアと良く似ているが、まず名称からしてねじれている（図15）。千川通りの由来である「千川」の暗渠化された姿が実は大塚三業通りである。三業通りが河川の蛇行と計画的三業地という自然と人為双方の名残を湛える一方で、千川通り本体は、いかにも人為的な直線街路でありながら、自然を表象してプラタナス通りと名乗る。このねじれた二本の通りが、界隈の日常的遊歩を支えている。

（坂内良明・中島直人）

●不整形の交叉路が界隈の力を集める

地形条件や形成過程の違いにより、様々な形態を持つ交叉路。既存の形態の持つ特性を活かした空間形成、演出を行うことで、界隈の焦点としてのポテンシャルを高める。

●都市の要所／界隈の焦点

辻、巷、追分など、人々が行き交う街路の交叉点（交路）は、古くから市が立ち、近世には高札場や辻番が設けられる等、まちの要所であった。日本の都市は求心的な全体構造を持ちにくいと言われるが、局所的には、交路は界隈の焦点であり、日本的な広場とさえ形容される。しかし、中央にモニュメントを配し、明確な都市の中心として存在する西欧の広場とは異なり、結節点としての特性が、空間形態や付随する要素、人々の活動等に顕れ、界隈の焦点として想起される性質を持つ。

交路にも様々な形態が存在する。江戸の場合、グリッド状街区で構成された下町では、整形の辻やT字路が多く形成された。一方、地形に応じた有機的な街路パタンに覆われた山の手では、不整形の三叉路や四叉路が多い。

これらの交路は、明治以降の都市交通や土地利用の変化等を受け、空間・機能の両面で変質してきたが、変化を受けつつも界隈の焦点として息づく特色ある交路が存在する。そこには、点を彩りつつ面をまとめ上げる空間技法が潜んでいる。

●界隈に浮かび上がる交路

不整形の交路は、街路の特異点として自ずと界隈の中に浮かび上がるが、例えば山の手に見られる複雑な交路は、既存の交路に向けて新たに道が引かれ、形成されている（図16）。交路がある種の引力を放ち、焦点としての性質を強める例である。

またこのような交路には、樹木や神社の鳥居等のランドマークが添えられ、古くから界隈のイメージの中心となってきたものもある（図18、19）。景観的にも特色ある既存の交路は、やはり引力を放つのであろう。中目黒八幡神社の交路（目黒区）は、周囲の宅地化に際して新たに道が付け加えられ、住宅地の焦点として浮かび上がる（図17）。

●交叉点の一角を彩る「ゲート」

繁華な商業地の交叉点は、しばしば付近に停留所や地下鉄駅を有し、回遊の拠点となる。これらの交叉点においては、角地に面する建物のみならず、街路の取り付き方が、視覚的イメージを高める場合も多い。

戦災復興事業により整備された渋谷センター街（渋谷区）は、駅前交叉点に向け計画的に軸線が曲げられた（図20）。広幅員街路に規定された一角に分け入るように設けられたセンター街のゲートは、門型のサインに加え、街路幅員の相対的狭さや、鋭角敷地に立ち上がる建物形状等により、交叉点において目を惹く存在となっている。ゲート自体が、ランドマークとして認識されるのである。

同様の空間形態は、街路拡幅により偶発的に生じた交路にも見られる。神田神保町のすずらん通り（千代田区）は、駿河台の地形に沿って湾曲した靖国通りと、台地を下る千代田通りの交叉点に入口を開き、門型モニュメントが人々を誘う（図22、23）。白山上の交叉点（文京区）も、交路の構成は江戸期とかわらないが、既存幅員の一筋の商店街のみが拡幅されずに残された結果、同様の形態を持つ（図21）。

他の交叉点と特徴を異にするこれらの交叉点においては、一角に分け入る商店街の個性を高めつつ、角地の建物と共にゲート性を演出することで、界隈の焦点としての視覚的特徴が高められる。

●界隈をつかまえる交路

地区の焦点としての特徴的な交路が、計画的に生み出される場合もある。明治以降の屋敷地等の開発により生まれた森川町（文京区、連載第1回参照）や三崎町（千代田区）の交路においては、地区内の街路が巧みに関係づけられる。

TX（つくばエクスプレス）の新駅開業により、近年にわかに活気を取り戻しつつある浅草六区（台東区）にも、一際目を惹く五叉路が存在する。浅草寺の火除地であった一帯は、明治初年の浅草公園地の整備に伴い、遊興地として計画された。その際に造成された大池に規定されて生み出された交路は、明治後期から大正にかけて、映画館・劇場がひしめく六区の焦点に位置していた（図24）。

池は戦後に埋め立てられ、往時の様相は一変するが、現在も五叉路が個性を競い合う複数の商店街を結びつけている。それぞれの街路においてもゲート性の演出と共に、個性的な景観形成が行われ、その先に広がる界隈の奥行を、視覚的に認識することができる（図25）。

（後藤健太郎・永瀬節治）

図17　八幡神社の叉路（目黒区）
神社の鳥居と大樹がランドマークとなっている。左手の道が新たに加わった。

図16　仙台坂上の叉路（港区）
近世以来の不整形の四叉路に、①②の道が付け加わって出来た。

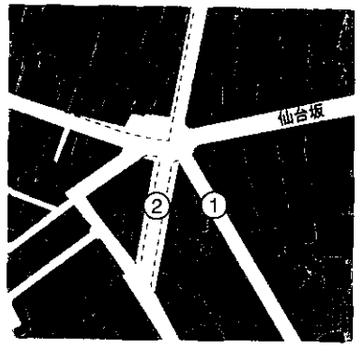


図19　現在の麻布一本松（港区）
三つの坂が合流する叉路の脇には、現在も一本の松が植えられ、上り坂のアイストップとなる。

図18　江戸時代の麻布一本松（江戸名所図絵）右手前の一角には辻番所が見える。

図23　すずらん通りの入口

図22　駿河台下の叉路

図21　白山上の叉路

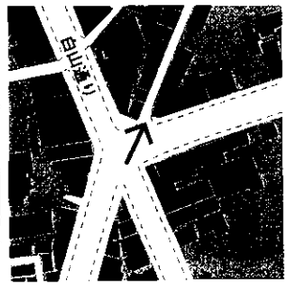
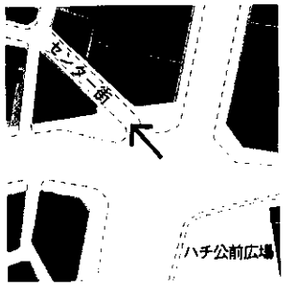


図20　渋谷駅前の叉路



広幅員街路の交叉点の一角に設けられた商店街の入口は、他にも多く存在する。交叉点の向かい側から見ると、隅切りによりふくらみを持った交叉点がゲートを引き立てると同時に、交叉点がゲートの前庭的な空間となり、奥へと伸びる街路の起点性が強調される。

図25　浅草六区の五叉路
街灯や門型モニュメント等により異なる演出の施された商店街の合流点であり、行き交う人々は、ここで六区の面的広がりを把握することができる。角には滞留者を想定した電光掲示板も設けられる等、広場的な雰囲気を持っている。

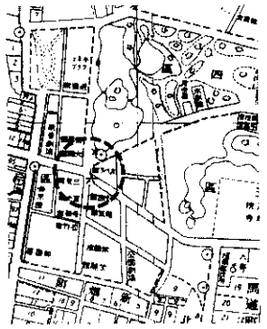



図24　大正8-10年の浅草六区（番地界入東京全図）